

学校教育における子どもの「過剰適応」に関する一考察

－「隠れたカリキュラム」による「社会化」に着目して－

中野 杏菜 (群馬大学)

1. 目的

本研究では、隠れたカリキュラムの観点から学校現場で生じる過剰適応の原因を明らかにし、解決策の提案を行うことを目的とした。

2. 研究方法

本研究の考察は、全3章で組み立てた。第1章では、過剰適応に関して社会化・個性化の概念をもとに整理した。第2章においては、学校教育が生み出す子どもの過剰な社会化の側面に着目し、役割・支配の観点から考察を行った。第3章では、学校教育の隠れたカリキュラムを捉え直し、子どもの過剰な社会化に対する解決策を検討した。

3. 考察

3-1 「過剰適応」と「社会化」の関係

「適応」は心理的な内的適応と社会的・文化的な外的適応からなる。前者は自分らしい自己を形成する個性化に、後者は社会からの期待を内在化する社会化に相当する。過剰適応は内的不適応感と過剰な外的適応からなり、社会化過剰の側面をもつといえる。社会化は児童期の重要な課題であり、社会化の場のひとつである学校は子どもの社会化過剰を助長する可能性があると考えられる。

3-2 学校現場における「社会化」の現状

カリキュラムは教師の意図の観点から、明示されたカリキュラムと隠れたカリキュラムに分類でき、後者のひとつに児童・生徒という役割が考えられる。教師が描くよい子像を基にした生徒化を求められる子どもは、役割期待を遂行している。教師と子どもの関係性は、役割期待を互いに遂行することでその役割が再生産される構造をもつ。また、教師・子ども間の支配的な関係性は、子どもに教師の正当な権威を感じさせる。この権威は、学校現場が監視者の視線を内面化し自発的に従属

化することを求めるパノプティコンとして機能することで自動化・没個性化され、子どもは権威を暗に感じ取って規律訓練化される可能性がある。

3-3 学校教育における子どもの過剰な「社会化」からの脱却

過剰な規律は社会化過剰傾向を生む。明示されたカリキュラムである校則でさえ、規律の度合いによって社会化過剰を生み出す隠れたカリキュラムとして機能するため、教師・子ども共に過剰な規律に自覚的になる必要がある。また教師は、集団社会における構造的役割と相互行為で創造する対人的役割の両方を果たすため、役割期待から外して振る舞う役割距離や役割期待を選択して組み立てる役割形成を行い、教師の正当な権威のイメージを崩す必要がある。そして、教師・子ども共に対人的役割の創造という面を意識した上で、行動が互いの役割を強化することを自覚し、関係性を創り上げる行動を取る必要があると考えられる。

4. 結論

本研究の考察を総括すると、学校教育における子どもの過剰適応の要因には、教師と子どもの「役割」や「支配」といった隠れたカリキュラムの影響があることが明らかとなった。教師・子ども共に、互いの役割や支配的な関係性を「自覚」して行動することが、子どもの過剰適応への解決策のひとつであることが示唆された。

5. 主な参考文献

- 1) 北村晴朗 (1965) 適応の心理, 誠信書房
- 2) ヴェーバー・マックス (1922) 社会学の根本概念, 清水幾太郎訳 (1972), 岩波書店
- 3) 安田三郎 (1981) 基礎社会学第Ⅱ巻社会過程, 安田三郎・塩原勉・富永健一・吉田民人編 (1981), 東洋経済新報社